OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フレーベル教育論における〈子ども〉の意味 : 〈願望時間〉としての〈子ども〉
Author(s)	矢野, 智司
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1985, 11, p. 19-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3752
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フレーベル教育論における〈子ども〉の意味

——〈願望時間〉としての〈子ども〉——

矢　野　智　司

目次

Ⅰ　問題
Ⅱ　〈人間の使命〉としての〈生の合一〉への努力
Ⅲ　〈子ども〉の意味と〈人間の使命〉
Ⅳ　フレーベルにおける〈子ども〉の意味
　—〈願望時間〉としての〈子ども〉—

フレーベル教育論における〈子ども〉の意味

——〈願望時間〉としての〈子ども〉——

I　問題

フレーベルのテキストは，一方において子どもの正しい育て方の方法の提示と，他方において子どもを軸として親に〈人間の使命〉を自覚させるという二重の機能をもっている。むしろ，読者としての親への呼びかけということ，〈人間の使命〉が子どもを育てるということを意味していることを考慮すれば後者の機能は小さいものではない。しかしながらこれまでのフレーベル研究においては，主として前者の面にのみ注目し，後者に関しては母親の独自の使命の自覚という以上には考察されてこなかった[1]。研究者はフレーベルのテキストから，子どもの発達論や教授法を抽出することに熱心なあまり，そのテキストが読者である親に与える経験といったものに対して考慮を払わなかったのである。しかしながらフレーベルが期待した読者は学者ではなく子どもをもつ親であり，子どもをどのように育てるかを考える親であった。それゆえにフレーベルの形而上学や発達論，教授法といった分析的な研究とは別に，素朴に親という読者に身をおいて，そのテキストが語る言葉を体験すること，そしてそこからフレーベルの教育論を理解することは妥当な読み方だと思われる。フレーベルの理論を読みとるのではなくして思想の指し示す方向から，思想の全体を読み取る試みだといってもよい。そのとき親の読書体験にとって問題となるのは，〈人間の使命〉といった語であり，おとなにとっての子どもの意味を述べた数々の文章であるといわねばなるまい。このような表現に着目するとき，フレーベルが子どもという思想を基軸として，テキストにおいて何を語ろうとしていたのかを読み解くことができるといえる。換言すれば，フレーベルの有名な，そして充分に理解されてきたとは言い難い言葉 》Kommt, laßt uns unseren Kindern leben!《[2] を，子どもという思想を基に解釈する試みだとも言える。このような視座から始めて，おとなにとっての子どもの意味は何であるのかということを自覚的に己の課題として考察したフレーベルの現代的意義について語る道が開かれるのである。

以上のような問題意識から，考察の順序は次のようになる。まず第二章においてフレーベルの人間観を〈人間の使命〉と〈生の合一〉という概念を中心に展開し，第三章においては子どものおとなにおける意味と〈人間の使命〉との関係について考察する。第四章では，フレーベルの子どもの把握を〈願望時間〉としての子どもと捉え，その意味と限界について考

察する。

Ⅱ 〈人間の使命〉としての〈生の合一〉への努力

「すべてのものの使命および職分は，そのものの本質，したがってそのもののなかにある神的なもの，ひいては神的なものそれ自体を発展させながら表現すること，神を，外なるものにおいて，過ぎゆくものを通して，告げ，顕わすことである。認識する存在，理性を持つ存在としての人間の特殊な使命，特殊な職分は，人間の本質を，人間のなかにある神的なものを，したがって神を，さらに人間の使命や職分そのものを，充分に意識し，生き生きと認識し，明確に洞察すること，さらにそれを，自己の決定と自由とをもって，自己の生命のなかで，実現し，活動させ，顕現することである。」[3]

フレーベルの世界観と人間観を最も明瞭に示す箇所である。フレーベルにおいてはすべてのものに神的なものが「宿り，働き，かつ支配している」[4] のである。そしてその神的なものがすべてのものの本質なのである。当然人間の本質は神性にあり，〈人間の使命〉はこの神性の認識と実現にある。教育は人間がこの神性を表現するようにすることであるから，フレーベルにおいて教育は〈人間の使命〉そのものであるといってよい。ところでこの神性，神的法則とは，統一から分離，分離から再統一へと向かう運動である。

「……総ては統一である。『総ては統一に基づき，統一から出発し，統一に向って努力し，統一に至り，そして統一に還る。』統一におけるこの努力と統一に向かってのこの努力とは，人間生活における百般の現象の基礎である。」[5]

このような人間生活における統一という在り方を，フレーベルは〈生の合一〉(Lebens-einigung) と呼んでいる。それゆえに〈人間の使命〉とは，さしあたり〈生の合一〉への努力（フレーベルは実に頻繁にこの努力という用語を使用している）を意味しているということができる。

このような〈人間の使命〉としての〈生の合一〉への努力とは具体的には何を意味しているのか。フレーベルの〈生の合一〉という用語は中心的理想を語るものとして使用されている。それゆえに理想的人間を示す文章は，〈生の合一〉の具体的な在り様を示したものとして理解することができる。フレーベルはいわゆる『カイルハウ小論文集』において，しばしばドイツ民族の理想について語っているが，この文章はフレーベルの理想的な人間の在り様を示すものとして読むことができる。『わがドイツ民族に寄せる』(1820年)[6]，『箴言』(1821年)[7] 等の記述をへて，『ドイツ教育全般について，および特にカイルハウ学園の一般ドイツということについて』(1822年) において次のように示されることになる。①知識と能力の根本性への努力　②統一性と全面性へと向かう努力，また統一性から寸断されない

連続的な全面性への努力　③それぞれの一定の段階にもとづいて，またそれぞれの一定の度合において，もっとも完全な形成へと向かう努力　④自然との合一，自然とその素朴さへの回帰，また高い精神的な意味において，自然との和解と調停とを得ようとする努力　⑤神に対する期待と神との合一を得ようとする努力[8]。また1836年の『1836年は生命の革新を要求する』においては，前に述べられた五つの命題は次のように言いかえられている。①神と一体となり，②自然と調和し，③自己の内部に統一をもち，人類の部肢的全体 (Gliedganzes) として三位一体的に生きること[9]。〈生の合一〉の意味内容はこのようにフレーベル内部において時期によって変動があり定義することは困難であるが，人間の内部において，人間と人類とにおいて，人間と自然とにおいて，人間と神とにおいて，分離を克服し，合一を通して大いなる全体性を回復することを意味していたといえる。

またフレーベルは，〈生の合一〉を人間の統一性 (Einheit)，個別性 (Einzelheit)，多様性 (Mannigfaltigkeit) において展開すべく述べている。いいかえれば，根本的統一性を基盤にしながら，それぞれの在り様を独自に個性的に展開することが，〈生の合一〉の個人の側における意味内容である。個別化の過程が同時に統一化の過程と結びつけられているところに，〈生の合一〉の過程のダイナミズムが示されているといってよい。〈生の合一〉の過程とは，このように単に統一，分離，再統一の過程ではなくして，統一性，個別性，多様性のなしとげられる三位一体の過程でもあるのである。

このような人間の在り様としての〈生の合一〉の原型的なイメージを，われわれは，いわゆる『フレーベル自伝』の中に見い出すことができる。フレーベルは少年のとき夫婦関係や性的関係がもたらす問題に心を痛め，人間だけが男女に分かれたまま遺棄されていることに深い苦痛と悲哀を感じていた（すなわち二元に分割されていることの不安）。フレーベルは次のように述べている。

「しかし私は全く私の感情と心情若しくは私の内部の要求であったところのものを宥和する何物をも私の内部にも外部にも見出すことが出来なかった。しかしどうしてまたそんな年齢でしかも私のような境遇でそのようなことの出来る筈があろうか，――その時他の兄姉達と同様に家から遠く離れていた一番年上の兄が暫くの間帰省した。そして私が榛の蕾に紫色の芯のあることを知って喜んだ時，彼は花にも両性に類する区別のあることを私に注意してくれた。今や私の心情は満足した。これまで私を苦しめてたものは全自然に広がっている組織であって，物言わぬ美しい花の類でさえこれに属しているということが解った。この時以来私の目には人間の生活と自然の生活，心情の生活と花の生活とは分離できないものになった。そして今でも榛の花を見ればそれが天使のように自然という大きな神の宮居を私に開いてくれるように思われる。」[10]

誕生後九カ月で母を失ない，継母との不和，父との葛藤を感じていたフレーベルは次のよ

うに言う「私は少年時代の初期に既に全く孤独を感じ，そして私の魂は悲哀に充たされていた」[11]と。このようなフレーベルのおかれていた状態を理解せぬ限り，このテキストの解釈は困難である。フレーベルは母と父の愛を求めているのであり，世界との隔離を廃して和解を望んでいるのである。それ故に自然と人間との間の同質性の体験は，フレーベルに救いをもたらすのである。人間と自然との両者を貫く同じ本質的法則，人の苦しみはこの法則によって成立しているが，その根本にはすでに統一が存在しているのであって，その限りこの根底にある統一が和解，合一を可能ならしめている。人は努力によってその和解の王国（生の合一）に到達することができるのであり，そのような合一の状態において「明瞭さ，和解，伝達，理解，平和，喜び，救い」[12]はもたらされるのである。フレーベルの〈生の合一〉の観念は，世界との間に離隔をもったフレーベルが再び世界と和解しようとするときのこの体験の理論化であった[13]。

フレーベルは後にたびたびこのような世界との関係について記述している。たとえば彼が自然へとたち向かう態度は，自然を客体として措定し観察し分析する態度ではない。自然は神聖を象徴するもの，世界調和の福音を告げ知らせるものである。『一月半ばの散歩，および子どものそりすべりと氷すべり』において，雪の結晶の観察について次のように述べている。

「……つまり直観し理解しうるひとつの単純な法則が存在していて，その法則にこのような多種多様なものも依拠しているのである……こうして人生において高度に精神化された生命の現象の場合にあっても，人間はその現象にいいあらわすことのできるある一定の合法則性を直観することも，まして実証することもできないのではあるが，しかし合法則性がそれらの現象の基礎に存していて，それゆえにまたわれわれの精神はどうしてもそのような合法則性を予感し探究することをやめることができないというようなことがよくあるものである。」[14]

このような世界への態度は，フレーベルがペスタロッチの直観のかわりに，全体性への前理解の在り様を示す用語として〈予感〉(Ahnung) を採用するに到った理由を説明する[15]。〈予感〉とは対象と距離をとることではなく，対象と主体との離距を無にすることである。人は神性を〈予感〉するために自然と交感する。すなわち〈予感〉とは〈生の合一〉への通路なのである[16]。フレーベルは〈予感〉の高次のものとして〈解釈〉(Deuten) を取り上げているが，そのとき〈解釈〉とは思考と心情が統一され，主客が統一される状態が意味されているのである。すなわち〈解釈〉とは〈生の合一〉そのものなのである[17]。

このようにフレーベルのいう〈生の合一〉ということを考えるとき，それはロマン主義者たちがしばしば問題にした〈ニルヴァーナ体験〉と類似の体験として読み解くことが許されるように思われる。自我の自然における溶解の体験，無限の宇宙への拡大の体験は，シュラ

イエルマッハらによって宗教的体験として理解されたが，〈生の合一〉もまたこのような宗教的体験の一つといってよい。フレーベルは自分のこのような体験に基づきながら〈生の合一〉を理想状態として定立させる。しかし〈生の合一〉が体験であるかぎりそこにとどまることはできない。統一は分離を不可避的に孕んでおり，矛盾，対立を逃れることはできない。人は再び統一へと向かわなければならない。この〈生の合一〉への努力こそ，神性＝人間性実現の過程に他ならない。フレーベルの教育方法とは，子どもを〈生の合一〉へと導くものに他ならない。恩物といわれる教具が，単に認識能力を高めたり，感覚を陶冶するだけのものではなく，分離と合一の経験をもたらすものとして構成されているのはこのような理由からである。そしてまた努力という用語が実に多用されるのも，〈生の合一〉が人生の様々な相において実現されては，また分離を生ずるという生の根本的な在り様が理解されているからに他ならない。〈生の合一〉への努力という概念の深層には，世界との離隔に思い悩む少年フレーベルが存在しているのである。

「人間は，束縛や鎖から自由を，個別性から統一や自覚を，分離から合一や平和を得ようと努力する存在として，また前に述べたことに向かって絶えず努力をささげ，そして憧憬する存在として，また見出されるべき統一への予感のなかで喜びかつ愛する存在として考えられなければならない°」[18]

Ⅲ　〈子ども〉の意味と〈人間の使命〉

「われわれに子どもがうまれた。神がこの両親に子どもを贈りたもうた。神がこの夫婦に子宝をたまわった。いったいこれらのすべての言葉の内面的な意味は何であろうか。いったい子どもがうまれるということはどんなことであろうか。子どもがうまれるとは，眼にみえた，精神的な本質，永遠に存在する本質があらわれること，実在するようになることである。」[19]

フレーベルのいわゆる〈児童神性論〉は子どもの本質を神性として捉え，そこから善性，無垢性，根源的な健全性として捉える[20]。この根拠が第二章で展開したフレーベルの形而上学的宇宙観にあるのはいうまでもない。人間の本質を神性と捉えるところから原罪の観念が否定され，しかも，まだ世界の悪に汚されていない子どもは，神性を損われておらず，無垢性，健全性を保持しているのであり，そこにおいて既に無垢性を失なったおとなよりも優れた存在であるともいえるのである。それゆえに子どもという存在は，おとなの損われている生を写し出す鏡となり，それによっておとなの神性を再び取り戻すための媒介ともなりうるのである。フレーベルのテキストはおとなの生との連関で子どもの意義が，読者であるおとなに語られているといってよい。「われわれは，死んでいる。……だから，さあ子どもたち

の所へ赴こうではないか。かれらを通して，われわれの言葉に内容を，われわれを取りまく事物に生命を与えよう。それゆえ，かれらと共に生きよう。かれらをわれわれと共に生きさそう (Darum leben wir mit ihnen, lassen wir sie mit uns leben.)。 そうすれば，われわれすべてにとって必要なものを，われわれは，子どもを通して手に入れるであろう。」[21]

子どもの無垢性に触れることによる人間性の回復は，ロマン主義にみられるテーマの一つであった。そこには現在の生，分割され，ゆがめられ，損われた生への根本的批判があり，その批判の根拠として未分化で無垢で健全な子どもの生が対比されている。このような図式自体は，既にルソーによって理想的人間の在り様としての〈未開人〉〈子ども〉を軸に文化批判がなされており，その批判の図式と同型であるといってよい。フレーベルは単に批判の軸として子どもを定立させるだけではなく，子ども＝根源的な人間の生にふれること，共に生活することによっておとなの生を淳化させ若返らせるのだと考えている。子どもとの生活はおとなから多くの悪や劣悪さを除去する[22]。フレーベルがその著作の中でしばしば使用している 》Kommt, laßt uns unseren Kindern leben!《 という句は，子どもとの生活によるおとなの生活の若返りと淳化をも意味内容に含んでいるのである。この句が文中に何度も繰り返されている論文『回顧と展望—新年にあたっての瞑想』においてフレーベルは次のように言っている。「……すなわち，われわれは，この思想 (Kommt, ……) を実行に移すことによって，われわれ自身に生きる。すなわちわれわれ自身のよりよい自己に生きることである。つまり，この思想を実行に移すことが，われわれの心にわれわれ自身の幼年時代の思い出を目覚ますことによって，またわれわれ自身の生活を補充し充足することによって，またわれわれ自身をより高く向上させるようにうながし，そのための機会をあたえることによって，われわれ自身のよりよい自己に生きるということである。」[23] (カッコ内は筆者)

子どもと (あるいは子どもに) 生きることがおとな自身を「より高く向上」させるのはなぜかという疑問がここでは残るが，後に再び問題にする。

子どもの第二の意味は，人類の連続的な発展の後継者としての子どもである。

「……しかし，人間はたえず新しいものによって生じ，また常に新しいものによって消え失せていく人類の中に現われ出るのである。そして人類は個々の人間を通して生成し，改めて陶冶されるのである。しかし，すべての人間は子どもとして現われ，子どもとして生まれ，かつては子どもであったのである。幼児期，幼児界，幼児はそれゆえに不変の出発点であり，発芽点であるとともに，同様に人間，人類および個々の人間の結合点であり，再帰点なのである。」[24]

人間に内在する神性＝人間性の展開としてフレーベルは歴史を捉えているといってよい。その展開は終局点をもつようには考えられておらず，人間は世代を交代させながら，無限に人間性の完成へと努力する過程そのものである。

「……したがって，人間および人間に内在する人間性は，外的現象としては，すでに完全に現われつくしたもの，完全に生成しきったものとか，すでに固定化したもの，不動のものとしてではなく，先へ先へ絶えず生成し続けるもの，発展し続けるもの，永遠に生きるものとして，無限と永遠のなかに安らう目標を目指しながら，発展や形成のある段階から他の段階へと，つねにいっそう前進し続ける姿において，考察されるべきである。」[25]

明確な不動の理想的目標ではなく，このように発展し続けること自体に価値をおくのは，キリスト教の正統的信仰の衰退と，そこに生み出されてきた価値喪失という精神的危機と連関している。信仰にかわるものとして，新たに無限の時間における人間性の発展（神性＝精神の歴史を通しての現実化）という理念が提示されたといってよい。そのとき子どもはおとなが虚無の時間を克服して，有意味な無限時間と結びつき，再び充実した現在（統一された生）を回復するための象徴として位置づけられることになる。子どもはおとなにとって理想的未来を予感させ，認識させ実現させるものとして解されるのである。理想的未来の創造主体として子どもを把握することによって，子どもは伝統を受けつぐ存在からむしろ未来を創造する存在へと転換させられることになり，そこから，模倣を中心とする教育方法からフレーベルの創造を重視する教育方法への転換が主張されることになる。このことはまた，子どもの未完成さ，依存性を自立能力の欠如として否定的に捉えることから，新しい世界の可能性を秘めたものとして肯定的に捉えることを要請する。フレーベルの子ども把握はこのような意味において子ども観を革新するものであった。

ところで人間性の発展が個人内部で完成されない限り，〈人間の使命〉としての人間性の実現＝神性の実現は次の世代を必要とする。いまや，子どもを持ち育てるということが〈人間の使命〉にとって最も重要なこととなる。「……つまりこのように人類の統一性や，人間性として人類のなかにあらわれた神性をたえず新たに，子どもとして実現し表現し告げることが人類の使命であり天命である。換言すれば人類の統一性およびその本質を子どものなかに感じたり，また感じるようにしたり，認めるようにしたり承認するようにしたりすることである。」[26]

前章において〈人間の使命〉の自覚が教育の目的であるとのべた。その〈人間の使命〉の実現が子どもをその歴史的連続性という意味から必要とし，今また自覚，認識，実現という意味から必要とするのだとフレーベルは言っているのである。フレーベルにおける子どもの第三の意味は〈人間の使命〉の自覚と実現の契機としての子どもである。『人間の教育』(1826年）における次の文章はそのことを明示している。

「ここから，夫婦や両親が生誕告知の前後においてなさねばならないすべてのこと――言行において純粋かつ明白であること，人間として価値と品位に充ち溢れていること，自己を神の賜物の番人，保護者，保育者となすこと，人間の職分と使命およびそれを達成する方法

や手段に関し知識を深めること――が，単純，明白かつ確実に生じてくる。ところで，親の子としての子どもの使命が，両親のつまり父と母の，父性的なものと，母性的なものの精神的なものと情意的なものの本質――その本質や強さについては，両親自身にも知られず，予感もされないままに，両親の内に潜んでいるような――を一致調和させて展開し，形成することにあるのと同様に，神および自然の子としての人間の使命は，神と自然の本質を，自然的なものと神的なものを，地上的なものと天上的なものを，有限なものと無限なものを一致調和させて表現することにある。家庭の一員としての子どもの使命が家庭の本質，家庭の精神的素質および力を調和させ，これを全面的に，しかも明瞭に展開し，表現することにあるように，人類の一員としての人間の使命と職分は，人類全体の本質や力や素質を発展させ，形成し，表現することにある。」[27]

以上述べられてきた子どもの意味は，この「家庭の一員としての子どもの使命」というところに展開されているといってよい。人間は自分たちの親達がなしてきた人間性の実現という〈人間の使命〉を，婚約ということを通して自覚し，結婚を通して実現する。それゆえに家庭はすべての合一の実現の場である。男として女として分離させられた人間は再び家庭において統一を見い出すのである（前章における『自伝』からの引用を想起）。

「……しかし男性と女性はさらに，私（結婚を擬人的に言っている）つまり結婚を通じて，家庭のなかで彼らの内面に宿る神的なものを啓示し外に向って創造する力をもつために夫(Gatte)と妻(Gattin)と呼ばれる。それはいわば有限的にあらわれそして現存している神(Gotte)として，それゆえ，私，つまり結婚は，神を告げ知らせるための人間の内面的な統合である。換言すれば結婚は，神から生まれたものである生命の絶えざる革新と若返りのための内面的な統合である。」[28]（カッコ内は筆者）

その統一の表現こそが子どもの誕生である。それゆえに子どもを持つということは自己の〈人間の使命〉の遂行であり，〈生の合一〉の顕現である。「……つまりこのように人類の統一性や，人間性として人類のなかにあらわれる神性をたえず，新たに，子どもとして実現し表現し告げることが人類の使命であり天命である。」[29] 子どもがうまれるとは「眼にみえない精神的な本質，永遠に存在する本質があらわれること，実在するようになること」[30]を意味しており，永遠なもの，天上的なもの，精神的なもの，神的なものが子どもという姿をとってこの地上に実在することを意味するのである。それゆえに子どもをもち育てるとは，人間性（神性）の実現であり，それは子どもにとっての実現であるとともに，親自身にとってもそうである。人間は子どもをもつことによって，そして子どもを育てることによって己の本質（神性）を認識し，実現することができるのである。フレーベルはそれゆえに『母の歌と愛撫の歌』（1844年）の中でたびたび読者たる母親に呼びかけ，子どもは〈天国〉を母に告げ知らせる存在であり，そのことによって母は己の内なる〈天国〉に気づくのだと述べ

ている[31]。このように有限なるものの中に無限なるものを見るということ，無限なるものへの憧憬を感じること，現象の内に神性を予感すること，これらのことは宗教的体験に他ならないが，子どもはおとなにとってこのような意味においても宗教的体験＝〈生の合一〉への媒介者なのである。前章で述べた〈生の合一〉の四つの側面ということで考えるならば，子どもという原初的な統一的生に触れることによって，自己内部の分割が統一され，人類，民族と結びつき，自然，神と合一することが実現されると言えよう。

家庭が〈生の合一〉の場であり，人間性の発展の場であるということは，いいかえれば家庭が〈人間の使命〉の実現の場である。それゆえに家庭は子どもにとっても親にとっても己の生を革新する場である。フレーベルはこのような論拠に基き，世界の革新の中心として家庭の新たなる革新を要求するのである。それゆえにフレーベルの結論は驚くべき素朴さに到達する。〈人間の使命〉とは，結婚し，家庭を作り，子どもをもち，育てること，それである。それゆえに先に述べたフレーベルの言葉 》Kommt, laßt uns unseren Kindern leben!《 とは，以上のような思想内容から理解されるとき，直にフレーベルの思想的核心の結晶したものと解することができよう。そして Kommt! と呼びかけるのは，フレーベル個人ではなく神であることも明らかであろう。それゆえにこの言葉は神聖な言葉として見做されてきたのである。

Ⅳ　フレーベルにおける〈子ども〉の意味
—〈願望時間〉としての〈子ども〉—

中世教会は，原罪的人間観から子どもを悪魔の子と呼んでいた。宗教改革者たちも程度の違いはあれ，その人間観を受けついでいた。たとえばピューリタンは厳格な原罪観から，回心をしていない子どもをまむしと呼んでいる[32]。啓蒙主義は原罪観を否定したが，理性主義から理性能力の劣った存在として子どもを捉え，いかに理性的存在へと高めるかを教育の主要な課題とした[33]。しかし，18世紀後半になると，文化批判的観点から未開人が「高貴なる未開人」として象徴的意味付与がなされ，同様の観点から，子どもは堕落以前の人間，天使として意味づけされるようになった[34]。このような思想的変化の背景には，家族の変化，乳児死亡率の減少といった社会的変化が対応しているのであるが[35]。アンシャンレジィームを批判する原理として「自然人」という概念を構想し，その連関で「善良なる子ども」を発明したのはルソーであった[36]。

ドイツにおいては，ルソーの影響を受けつつもカントにおいては，理性の未成熟として子どもを捉えていたが，ヘルダーによるとこの未成熟は可能性へと読みかえられ[37]，シラーはこの子どもの可能性，無規定性を神性なものと捉えた[38]。このような展開の中でロマン主義

者たちは，新プラトン主義的宇宙観を背景にしながら，子どもを無垢なるものと捉え，人類の黄金期，失なわれた楽園として独自の意味付与をしていくことになる[39]。このことはロマン主義者たちが，理性より感情を，現実より夢を，昼より夜を評価したことと無縁ではない。彼らは子どもという在り方に，自分たちに損われ失なわれてしまった生の原形を見い出していたのである[40]。

このような子どもに関する思想の系譜の中で，フレーベルの子ども理論はどのように位置づけられうるのであろうか。以下フレーベルの子ども理論の特徴を取り上げ，その意義について考察しよう。その際にも，これまで取られてきた視点，つまり，子どもの意味はおとなの在り様と密接に関係づけられているのだという視点から述べられるのはいうまでもない。

(1) 〈人間の使命〉を〈生の合一〉への努力としてとらえたとき，人間の目的は固定し確定したものではなく，その努力の過程自体が目的と化してしまう。それゆえにおとなはもはや人間の完成ではなくなり，子どもと同様，努力する存在として位置づけられることになる。幼児からおとなへと向かう人生という時間は，それぞれ固有の価値ある相へと区切られるが，ある固定した目的へと実現されていくべき段階といったものではない。時間の本質的在り方が〈生の合一〉への努力である限り，それぞれの相において固有の〈生の合一〉が存在している（たとえば幼児は既に母との合一の内に在る）。人間の人生においてそれぞれ相が固有の価値を有している限り，それぞれの相（時間）は等価なのである。そのように考えるとき，デューイが『民主主義と教育』（1916年）においてヘーゲルと並べてフレーベルの理論を展開説として完成へ向かっての展開としての教育として理解しているのは精確ではない[41]。むしろ〈生の合一〉への努力という人間理解は，デューイのさらなる生長（more growth）という人間理解と，おとなと子どもの価値を水平化するという地点において同じ働きを示すものといってよい[42]。

(2) 構造的には上述したことと同じことであるが，フレーベル自身が明確な理想的社会像を提示することをせず，人間性の展開をもってそれにかえていることは，子どもの独自性を重視することを可能ならしめている。理想的社会の住人としての子どもを考えるとき，その社会像が明確なとき，子どもは社会変革のファクターとして捉えられるであろう（たとえばフレーベルと同時代のヘーゲルにおいては，子どもは克服されるべき時期として否定的に理解されている）[43]。社会像が未定であり，未来が開かれたものとして考えられているとき，しかも，子どもの自然に従った教育によってのみ未来のすぐれた後継者が成長すると考えられるとき，子どもは価値を高めるのである。ここには自然を巡るフレーベルの形而上学が潜んでおり，そのような自然に従う人間形成が同時に新しい共同体の創出を可能ならしめると考えられている（『1836年は生命の革新を要求する』はこのような問題意識の所産である）。中

世の封建的共同体から解放された人間は一方で新しい人間形成を，他方で新しい共同体を求めねばならぬという課題を背負っていたが，フレーベルはその問題を〈生の合一〉への努力を自己の使命とする人間の教育に答を見い出そうとした。その方法は一方における子どもの教育，他方における子どもの教育を通してのおとなの生の革新という二重の構造をもったものであった。こうしてフレーベルは子どもという在り方に，合一の契機を見い出すのである。

「(根源的原民族のなさねばならぬことは) 最終的には現世と来世との間の，天上界での生活と地上での生活との間の分裂や深淵や分離の壁が消滅させられ，両方がお互いを内に含みあうものとして，不変的全体や全体生命として把握され，実際に生かされるようにし，かくして地上界が天上界に高められ天上界が地上界にもたらされるようにすることである——久しい間，われわれおよび人類にとって待望されていた平和と喜びの一体となった生命として，ユリのような純粋さをもった生命として，神とひとつになった生命として，人間性のなかにあらわれた神的な生命として。」[44] (カッコ内は筆者)

これがフレーベルの夢みた共同体のイメージである。ゲーテのマイスターがヨーロッパ世界に解決の方途が見い出せなかったように，フレーベルもまたこの1836年の論文でアメリカへの移住を宣言するのである[45]。この移住の計画は実現されることなく挫折し，フレーベルはドイツにとどまり社会改良の道を選ぶことになる。フレーベルの関心は急速に幼児教育へと収束していく。フレーベルの夢みた共同体は〈子どもの庭〉(Kindergarten) の姿をとって実現されることになる。〈子どもの庭〉は，失なわれた楽園の回復として象徴的神性空間であるが，子ども—おとなの相互活性化を通して社会を革新していく空間でもあった。

(3) 以上のような価値としてのおとな像の消滅と，未来の予言不可能性（この二つのことは社会変化の反映にちがいないが）この二つのことと結びつき，人間の本質を神性として捉える方法は，子どもの価値を最大限に高めることになる。子ども＝損われていない根源的全体的な生，輝かしい未来の世界の象徴，ヘルダーリンが「黄金時代」と呼んだ子ども期は，フレーベルによっても回帰すべき時間として，またあるべき理想的未来の時間として，過去と未来に向けられた二重の〈願望時間〉(Wunschzeit)[46] を象徴するものとして捉えられることとなる。このような〈願望時間〉としての子どもが捉えられる背景には，伝統的キリスト教の崩壊とそれに伴って出現してきたところの価値の相対化と，不安，世界苦といった当時のロマン主義者たちをとらえた感情が存在している[47]。彼らは今生きている世界を厭わしく思っており，そのような精神的荒廃からのがれる手段の絶望的な探究を繰り返していた。現在の分裂し細分化された生の苛烈さは，過去——(中世キリスト教世界，失楽園以前，そして子ども) そして未来——(理想が実現される時間，子ども) を理想化することになる。〈願望時間〉としての子どもは，このような価値ある過去と未来を透視するための媒介者である。そしてまた共同体，自然との断続，目的をもたない無限の時間の中で位置をしめるこ

とのできなくなった人間が再び共同体と和解し，無限の時間の中に己の意味を見い出し生きることを可能ならしめる媒介者であった。おとなは子どもと共に生きることを通して，〈生の合一〉への努力を，すなわち〈人間の使命〉を自覚し実現するのである。おとなの分裂し細分化された生は，根源的な生＝子どもへと回帰することを通して統合化され，若返らされ再び己の神性を意識するのである。フレーベルの〈願望時間〉としての子どもは，ロマン主義者達が好んで使った隠喩としての子どもと相同であるといってよい。

おとなが現実との間に緊張関係を失なったとき，フレーベルの発見した〈願望時間〉としての子どもは，いわゆるセンチメンタルな子ども観へと転落することになる。すなわち，おとなが現在の生を反省し，未来に理想を実現しようとするかぎりにおいて〈願望時間〉としての子どもは意味を有している。そのような現実への緊張関係を失なったとき，子どもはおとなにたいして単に慰藉を与えるものとなる。子どもの中におとなは，自分がかつてなりたいと思いそして実現されることのなかったものの象徴，挫折した希望の象徴を見い出し，自分の情緒を満足させることになる[48]。

フレーベルの子どもの思想は近代的な意味における〈教育的家庭〉〈親〉を発見させることになる。すなわち自然過程の子育てから，倫理過程としての幼児教育への転換は，自覚化して子どもを教育することを人生の意味として捉える〈親〉を成立させることを意味する[49]（このような原理化の背後には当然，社会変容に伴う旧来の家庭原理の崩壊があり，家庭原理の再構築をフレーベルは自らの課題としていたのだが)[50]。このことは，子どもをその生まれたときから，教育という枠内で捉えることを促し，また，教育されねばならぬ対象として捉えることを促すことになる。そのような家庭においてすでに述べたような緊張関係を失なうことは，子どもを教育の名のもとに保護し，また己の疎外を〈願望時間〉として子どもに投射することになる。子どもへの関心の高まりは，己の価値の喪失，世界との緊張感の喪失と相即することとなる。

〈註〉

1) これまでにも，シュプランガー，ボルノーらによっても子どもがおとなに対してもつ意味について考察されてきたことは言うまでもないことであるが，そのとき子どもの母親にとっての意味のみが語られたり，そうでない場合でも，〈人間の使命〉〈生の合一〉といったフレーベルの中心概念とおとなの生き方とを結びつけて説明されることはなかったように思われる。本論文はフレーベルの教育思想を，子どものみならずおとなの生き方をも包摂する思想，「人間の教育」の思想として理解しようとする試みである。

2) フレーベルの墓碑銘にもなっているこの言葉がもつ問題点の一つは，この unsern Kindern の三格を「子どもらのために」あるいは「子どもらとともに」と解するか，位格ととって「子どもらに」「子どもらのもとで」と解するかということにあるとされてきた（因みに J. Jarvis の英訳では Come, let us live *with* children! と訳されている)。しかしこの語が初めて登場する『人間の教育』ではこの言葉のすこし前に，Darum eilen wir! lassen wir uns, unsern Kindern, lassen wir durch sie unserer Sprache Gehalt und den uns umgebenden Gegenständen Leben geben. Darum leben wir *mit* ihnen, lassen wir sie mit uns leben (M. E. S. 55) と

あり，文法上の問題を除けば，どちらと解そうとそれほど意味に違いはないように思われる。むしろこの言葉がもつ問題は，どうしてこの言葉がフレーベルの思想を示すスローガンとなりえたのかということにある。この問題を解く鍵は，「子どもらに」生きる親やおとなとは何を意味しているのか，彼等にとって子どもとは何かということをフレーベルに従って理解することである。

3) F. Fröbel: Ausgewählte Schriften, Hrsg. v. E. Hoffmann. Bd. 2. Die Menschenerziehung. 1951. S. 7 f. (以下, M. E. と略す)。邦訳,『人間の教育』荒井武訳, 岩波文庫, 上, pp. 12-13.
4) F. Fröbel: M. E. S. 7. 邦訳, 上, p. 12.
5) F. Fröbel: Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Hrsg. v. W. Lange, Abt. 1, Bd. I, 1966, (Neudruck der Ausgabe 1862 und 1874), S. 89. (以下, G. P. S. と略す)。邦訳, 小原國芳, 荘司雅子監修,『フレーベル全集』玉川大学出版部, 第1巻, p. 148.
6) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 1, Bd. 1, S. 231-238. 邦訳, 第1巻, pp. 363-374 参照。
7) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 1, Bd. 1, S. 272 ff. 邦訳, 第1巻, pp. 423-426 参照。
8) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 1, Bd. 1, S. 291-304. 邦訳, 第1巻, pp. 454-473.
9) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 1, Bd. 2, S. 556. 邦訳, 第3巻, p. 622.
10) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 1, Bd. 1, S. 39 f. 邦訳, 第1巻, p. 71.
11) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 1, Bd. 1, S. 33. 邦訳, 第1巻, p. 62.
12) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 1, Bd. 1, S. 268. 邦訳, 第1巻, p. 418.
13) 〈生の合一〉がフレーベルの思想の中心概念であることは，フレーベルの著作集を編集したランゲが解説において指摘して以来，定説になっているといってよい。しかし，そこでランゲが述べている〈生の合一〉の三つの意味にしても，その内容の分析は行なわれてはおらず明瞭なものとは言い難い。本論文は〈生の合一〉を経験として読み解き，その内容の一つとしておとな—子どもの相互活性化を提案するという，〈生の合一〉解釈の一つの試みでもある（むしろ重心はおとなの方におかれているのではあるが)。もちろんこのような場合でもフレーベルの形而上学的意味づけとの連関が問題となろう。初期の「球体法則」との関連，あるいは死の前年にマーレンホルツ・ビューロウ夫人にあてた手紙の中での〈生の合一〉の形而上学の検討は今後の課題となる。
14) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 1, Bd. 2, S. 371. 邦訳, 第3巻, p. 316.
15) 予感については，浜田栄夫「フレーベルの教育思想と予感」（教育学研究，第46巻，1号）参照。
16) O. F. Bollnow: Die Pädagogik der deutschen Romantik: von Arndt bis Fröbel, Stuttgart, 2. Aufl. 1967. S. 206. 邦訳,『フレーベルの教育学』岡本英明訳, 理想社, 1973。
17) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 1, Bd. 2, S. 532 ff. 邦訳, 第3巻, pp. 581-585.
18) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 2, S. 9. 邦訳, 第4巻, p. 28.
19) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 1, Bd. 2, S. 384. 邦訳, 第3巻, p. 336.
20) F. Fröbel: M. E. S. 12. 邦訳, 上, p. 20.
21) F. Fröbel: M. E. S. 55. 邦訳, 上, p. 117.
22) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 1, Bd. 1, S. 466. 邦訳, 第3巻, p. 176.
23) F. Fröbel: G. P. S. Abt 2, S. 3. 邦訳, 第4巻, pp. 17-18.
24) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 1, Bd. 1, S. 390. 邦訳, 第3巻, p. 54.
25) F. Fröbel: M. E. S. 17. 邦訳, 上, p. 30.
26) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 1, S. 506. 邦訳, 第3巻, p. 533.
27) F. Fröbel: M. E. S. 18 f. 邦訳, 上, p. 32.
28) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 1, Bd. 2, S. 508. 邦訳, 第3巻, p. 537.
29) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 1, Bd. 2, S. 506. 邦訳, 第3巻, p. 533.
30) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 1, Bd. 2, S. 384. 邦訳, 第3巻, p. 336.
31) F. Fröbel: Friedrich Fröbels Mutter und Koselider, Hrsg. v. J. Prüfer, 1927. S. 62. 邦訳, 第5巻, p. 263.
32) B. Wishy: The Child and the Rebublic, 1982. p. 11.
33) 為本六花治はこのような子どもの捉え方を，先の原罪説と対照して「認識論的原罪」と呼んでいる（「近代教育の自覚的発見」,『教育学を学ぶ』所収, 柴田義松他編, 有斐閣選書, pp. 38-39)
34) P. P. Wiener (ed.): Dictionary of History of Idea, 》Primitivism《 の項を参照。
35) Ph. アリエス『〈子供〉の誕生』杉山光信, 杉山恵美子訳, みすず書房。
36) J. H. Van den Berg: The Changing Nature of Man, introduction to a historical psychology (Metabletica), 1961. 拙論「フアン・デン・ベルクと子どもの歴史心理学的研究」, 和田修二編,『世界の幼児教育』, 第6巻, 日本らいぶらり。

37) カントが「人間は教育されなければならぬ唯一の被造物である」と言うとき，子どもの未熟さは否定され克服されるべきものとして以上ではなく，啓蒙主義者の貌をのぞかしている。それに対してヘルダーの次のような文章では未熟さを可能性へと読みかえる方向が示唆されているといってよい。「人間がかくも無力で，かくも貧しく，かくも自然の導きから見放され，他のいかなる動物にも見られないほど完全に技能や才能を欠いたままこの世に生まれてくるのは，まさに人間が，他のいかなる動物とも異なって，教育を享受せんがためであり，そして人類が，他のいかなる動物類とも異なって，一つの緊密に結合した共同体とならんがためにほかならない。」（『言語起源論』大阪大学ドイツ近代文学研究会訳，法政大学出版局，pp. 133-134.）

38) J. C. F. シラー『美学芸術論集』石原達二訳，冨山房百科文庫，pp. 231-232. また，K. シュミット『政治的ロマン主義』大久保和郎訳，みすず書房，pp. 85-86.

39) ロマン主義の子どものイメージを研究したものとしては，P. カヴニー『子どものイメージ――文学における「無垢」の変遷』江河徹監訳，紀伊國屋書店，参照。但しここで取り扱われているのは英米の文学者に限られている。子ども＝「黄金時代」「失なわれた楽園」という隠喩はノヴァーリスやヘルダーリンといったドイツロマン主義者のみならず，ショーペンハウエルやニーチェによってもニュアンスを変えながらも使われていく。もちろんフレーベルの子どもの思想はドイツロマン主義，アルントやジャン・パウロの教育的著作の影響抜きには考えることはできない。

40) この系譜は，子どもがおとなの在り様との連関でどのように意味づけられてきたかという視点から素描したものにすぎない。子どもに関する思想史のより包括的な叙述は，M. J. Langeveld: Die Vorgeschichte unseres heutigen Bildes vom Kinde, in: Studien zur Anthropologie des Kindes, (1 Auflage) Tübingen, 1956. あるいはまた，R. Lassahn: Zur Geschichte der Kindheit, in: Pädagogishe Anthropologie, Heidelberg, 1983. 為本六花治「近代教育の自覚的発見」，『教育学を学ぶ』所収，柴田義松他編，有斐閣選書，また子どもがおとなにどのような影響を与えるかということについての歴史的変化に関しては，次を参照。R. Q. Bell, L. V. Harper: Child Effects on Adults, Part I, Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, 1977. 子どもとおとなとの関係の歴史的変化については次を参照。J. H. Van den Berg: The Changing Nature of Man introduction to a historical psychology, (Metabletica), 1961.

41) J. Dewey: Democracy and Education, 1916. pp 57-58.

42) 拙論「デューイ教育論における〈子ども〉の問題――〈子ども〉の構成理論について――」（大阪大学人間科学部紀要，第9号，1983）

43) G. W. F. ヘーゲル『法の哲学』藤野渉，赤澤正敏訳，中央公論社，p. 402.

44) F. Fröbel: G. P. S. Abt. 1, Bd. 2, S. 561. 邦訳，第3巻，p. 630.

45) このことに関しては，E. シュプランガー『フレーベルの思想界より』小笠原道雄，鳥光美緒子訳，玉川大学出版部。

46) A. ドーレンは「願望時間と願望空間」（海，1970年8月）において，人間の憧憬を時間と空間に分けて捉え，ユートピアを願望空間（Wunschräume），千年王国を願望時間（Wunschzeit）として区別し，その本質的差異を明らかにした。本文にも述べたとおりフレーベルのKindergarten運動は「地上楽園の回復」であり願望時間に他ならない。

47) H. G. シェンク『ロマン主義の精神』生松敬三，塚本明子訳，みすず書房，第2部参照。

48) J. Dewey: The Interpretation Side of Child-study, 1897. in: Early Works of John Dewey, Southern Illinois University Press, Vol. 5. p. 217.

49) このような神性の実現という形而上学を基盤としたフレーベルの親として在ることの倫理的規定は，ロマン主義的世界観が疑わしいものと見做されるに従い受け入れがたいものとなっていく。しかしこのフレーベルの延長線上に，自由な決断として親となることを選び取ることのうちに人間の倫理的在り方を見い出すという M. J. ランゲフェルドの教育思想を位置づけることは妥当であろう。

50) E. シュプランガー「国民教育者，婦人の教育者としてのフリードリッヒ・フレーベル」『現代文化と国民教育』所収，小塚新一郎訳，岩波書店，p. 107.

〈文　　献〉

註で挙げた他に次の文献を参考にした。
岩崎次男，酒井玲子他：『フレーベル，人間の教育』有斐閣，1979.
長田　新：『フレーベルに還れ』新版，フレーベル館，1981.
荘司雅子：『フレーベルの教育学』大八洲出版，1948.
——　：『フレーベル研究』講談社，1953.
——　：『フレーベルの生涯と思想』玉川大学出版部，1975.
H. Heiland: Fröbel, 1982.
J. Prüfer　: Friedrich Fröbel —— Sein Leben und Schaffen, 1927.

A STUDY ON F. FRÖBEL'S THOUGHT OF THE MEANING OF CHILDREN FOR MEN

Satoji YANO

In writing his works, Fröbel seems to have had in mind two functions to be performed by them. The first is to tell the readers what is the right way of educating their children. The second is to make them realize "the mission of men", which is nothing but to live with children. So far, however, Fröbel's educational thought has been understood only in respect to the above first function and regarded merely as the theory of teaching, developing and educating children. This point of view alone seems unable to give full explanation of Fröbel's famous words, "Kommt, laßt uns unseren Kindern leben!" (Come, let us live with children!). By arguing that the second function is also essential, I shonld like to clarify the meaning of the above quoted Fröbel's words.

In this case "the meaning of children for men" should also be brought into question. We can distinguish and categorize three aspects in Fröbel's theory of children.

(1) According to Fröbel, children are by no means originally sinful. On the contrary, they are innocent and sound. They are the expression of the divine law. So men can find their lives distorted and injured by contrasting their own lives with those pure lives of children. Thus men can refine and inspire their lives by living with children.

(2) Children are the successors of the continual development of mankind. In other words, they are the agent in the realization of the divine law. This realization cannot be fulfilled in one generation. It must be continued endlessly by successive generations. So from the view point of this "mission of men", men should be with children and be engaged in educating them.

(3) To have children means "the unifying of life" between man and woman. To educate children promotes in men the awareness and realization of the divine law. Children being the expression of the eternal, or the divine, we can look out the paradice through children.

In short, the striving for "the unifying of life" in men ("the mission of men") means to live with (to or for) children. If we thus interpret the meaning of children for men, we seem to be able to understand that Fröbel's expression "Come!" comes from "the mission of men", i. e. the calling of God.

Fröbel tried to replace the natural process of bringing up children with the ethical process of men. He discovered men who realize themselves through children. He had aimed at "the renewing of life" (the renewing of individual man and society). He hoped that this plan would be realized through two processes. One is the process of educating children, and the other is that of making men aware of "the mission of men". His Kindergarten movement derives from this plan. This essay will also enable the better interpretation of this movement.